

スチューデント・サクセスを支える

アカデミック・アドバイジング

清水 栄子

愛媛大学教育・学生支援機構
准教授

はじめに

アカデミック・アドバイジング（以下「アドバイジング」）は、100年以上前に米国で導入された学生への支援制度であり、社会の発展や大学の役割の変化に応じて、その内容や担当者の役割も変化してきた（清水2015）。現在では、学生が人生やキャリアの目標を明確にし、それを達成するための学習計画を継続的に支援する制度として理解されている。学生はアカデミック・アド

バイザー（以下「アドバイザー」）との面談を通して、必要な情報を得て、自ら学業上や個人的な課題の解決策を見つけ、目標達成に向けて進んでいくことができる。このように、アドバイザーはスチューデント・サクセスにおいて重要な役割を果たしている（Kuhほか2006）。スチューデント・サクセスとは、単に卒業を意味するのではなく、学生にとって望ましい結果を意味する。すなわち、学生が知識やスキルを習得すること、学業成績を向上させること、学習目標を達成することに加え、大学生活に対する満足感を得ることも含まれる（Kuhほか2006）。アドバイザーは、学生の学業面の支援にとどまらず、全人的 (holistic) な成長も視野に入れた支援を提供する重要な役割を担っている。

近年、日本においてもアドバイジングへの関心が高まっている。「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）¹では、大学教育の質を高める方策の一つとしてアドバイザー制度が紹介されている（中央教育審議会2012年）。さらに、文理横断・文理融合教育の質保証に向けた取り組みとして、教育課程上の工夫と

ともに教職員や専門スタッフによるきめ細かな支援としてアドバイジングが取り上げられている（中央教育審議会2023年）。数は少ないがアドバイザー等の専門職の配置を進めている大学も見られる（文部科学省2023）。大学教育の質保証や多様化する学生の課題・ニーズへの対応のため、学生に寄り添いながらスチューデント・サクセスを支援するアドバイジングに対するニーズは高まっている。

アドバイジングへの関心が高まる一方、担当者の能力開発の機会は十分ではなく、急務の課題となっていた。このような背景のもと、日本アカデミック・アドバイジング協会（JAAA）が2021年に設立された。協会の目的は、「スチューデント・サクセスを促進するアカデミック・アドバイジングの理論と実践を日本の高等教育において確立し、普及すること」にある。JAAAは、会員同士の交流を目的としたサロン、会員の能力開発を目的とした研修会、実践や研究の成果を共有する年次大会を開催している。また、研究誌やニューズレターの発行により、アドバイジングに関わる研究成果や有益な情報も公開している。本稿では、JAAAの活動内容に焦点を

当てながら、日本の大学におけるアドバイジングの現状と課題について整理する。最後にJAAAの今後の展望について私見を述べたい。

1 アドバイジングの支援内容とアドバイザーの能力

(1) 日本におけるアドバイジングの支援内容

JAAAはアドバイジングを、「学生が将来の目的・目標を設定し、その達成に向けて進む過程を担当者が支援し、途中でアセスメントを行いながら個々のニーズに沿った支援を提供すること」と定義している（JAAA 2021）。この定義では、アドバイジングの支援範囲は、学業面だけにとどまらず、キャリアや個人的な課題への支援も含まれている。JAAAは包括的な定義としているが、日本におけるアドバイジングの具体的な支援内容は、細分化されており次の4つの内容に分類される。1つ目は専攻やコース選択に関するレイトスペシャリゼーションに対する支援、2つ目は学生の生活全般に関わる課題解決支援、3つ目は履修選択・計画に関する支援、4つ目は海外留学プログラムの履修計画に関する支援であ

る（清水2024）。

(2) アドバイザーの能力

日本におけるアドバイジングの導入は初期段階にあり、アドバイザーに求められる能力は明確化されていない。そのため、ここでは米国のアドバイジングの取り組みを参照し、アドバイザーに求められる能力について紹介する。

米国ではアドバイザーは、学生の状況に応じて情報提供、提案、助言、コーチング、メンタリングなど多岐にわたる役割を果たしている（Kuhn 2008）。学生との対話は、学生本人の自己決定能力や問題解決能力を育む効果があるとされ、そのためにはアドバイザーと学生との信頼関係が欠かせない。また、必要に応じて、他の専門部署や専門家へ紹介（リファー）を行うことも重要な役割であり、各リソースや人材とつなぐという意味で、車輪のハブにたとえられる。

米国の専門職団体である NACADA (National Academic Advising Association) は、アドバイザーの職務に必要とされるアドバイジングの基礎となる広範な理解、知識、技能を明確化し、専門職開発を推進するために「アカデミック・アドバイジング・コア・コンピ

概念 (Conceptual)	アドバイジングを実施するうえでの文脈を提供する要素。効果的な助言を提供するために、アドバイザーが理解しておくべき考え方や理論が含まれる。 例) 高等教育におけるアドバイジングの歴史と役割 アドバイジングに関連する理論 アドバイジングの方法と戦略 アドバイジングに期待される成果 など
知識 (Informational)	アドバイジングの内容や情報を提供する要素。所属大学で学生を支援するためにアドバイザーが習得しておくべき知識が含まれる。 例) 所属機関の歴史・使命・展望・価値観・文化 カリキュラム・学位プログラム・その他の修学要件と選択肢 所属機関固有の方針・手続き・規則・法規 多様な学生集団の特徴・ニーズ・経験 など
関係性 (Relational)	アドバイザーが学生に対して他の2つの要素から特定の概念や情報を伝えるための技能を規定する。 例) アドバイジングに対する自身の哲学を明確に述べる 信頼関係を形成し、アドバイジングの関係を構築する 包摂的な敬意を払った態度でコミュニケーションをとる 成功をもたらすアドバイジングを計画し実践する など

出典 NACADA Academic Advising Core Competencies Model(2017)

[表1] コア・コンピテンシーモデルの例

テンシーモデル」(NACADA 2017)を提唱している。このコンピテンシーモデルは歴史的に改訂が行われ、米国の大学での標準モデルとして受け入れられている。「表1」はNACADAによるコア・コンピテンシーモデルの例である。日本に適用する際には、ニーズに沿ったアドバイザー研修を企画する際に体系的のある指針として活用できるものと考ええる。

2 日本におけるアドバイジングの組織化事例

アドバイジングの組織化をテーマにしたシンポジウム(JAAA第4回年次大会…2024年8月31日開催)から、3大学における具体的な事例を紹介する(JAAA第4回年次大会要旨集2024)。

(1)メジャー・マイナー制の履修選択・計画支援―新潟大学新潟大学の「全学分野横断創生(NICE)プログラム」(2020年度文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業」採択)は、全学的なメジャー・マイナー制の展開と整備を目的としている。その一環として、アドバイジングが重要な役割を果たしている。このアドバイジングは、学生が自分の学修目的や将来の目標を決

め、それを達成するための継続的な支援を目的としている。具体的には、マイナー履修に関する質問対応、履修計画を支援するための「分野横断デザイン」科目の提供、その後のフォローアップが、2名のアドバイザーを中心に行われている。また、外部資金提供の終了後もアドバイジングを継続するために、これまでの経験の蓄積から、相談内容のデータベース化、ガイドラインの作成、マニュアルの整備が進められている。

(2)学部によるアドバイジング―創価大学文学部

創価大学では、2008年度から全学的なアドバイジング制度が導入され、すべての学生に専任教員がアドバイザーとして配置されている。この制度により、特に成績不振の学生との面談を通じて成績向上に一定の効果が見られている。文学部では、3年次に主専攻を選択するメジャー制度や履修科目の多様化・複雑化に対応するため、2023年度から独自のアドバイジングを導入し、主に次の2つの取り組みを行っている。

1つ目は、学部アドバイザーとして専任教員を配置することである。学部アドバイザーは、初年次教育科目や1・2年次を通じてアドバイジングを継続的に運営し、成

績不振者や合理的配慮を必要とする学生への対応において中心的な役割を果たしている。学生の課題を早期に見し、学内の学習サポートデスクや障害学生支援室などと連携する体制も整備されている。また、専任教員として学部アドバイザーがいることで、他の教員も学部アドバイザーに相談できるようにもなった。2つ目は、ピアサポーターの育成である。「ピア・サポート実践Ⅰ・Ⅱ」という授業を通じて、学部の教育目的やカリキュラムの仕組み、大学全体のリソース、アドバイジングの考え方や自律的学習や協働的学習の意義を学んだ学生が、初年次教育科目のSA (Student Assistant) として新入生のサポートを担当している。

(3) 大学生生活での学生が抱える課題解決支援

ー岡山理科大学

岡山理科大学では、学生生活に関わる課題解決や自己実現を支援するため、2021年4月に「アカデミック・アドバイジング・デスク」を設置した。このデスクについては、「履修、健康、就職、サークル、人間関係など、大学生活に関するあらゆる問題に対応し、どこに相談すべきかわからない場合でも気軽に相談できる場」

として同大学のウェブサイトで紹介されている。アドバイザーは2名体制で、特に人間関係のトラブルや連続欠席、不登校など、学生が抱える多様な課題に対応している。また、必要に応じてチューターやキャリア支援センター、学生課とともに学生支援を行うなど関連部署と連携を図っている。



第4回年次大会シンポジウムの様子
(新潟大学・創価大学・岡山理科大学)

3 アドバイジングの組織化に向けた現状と課題

組織化事例に見られるように、各大学ではそれぞれの文脈や学生の課題・ニーズに応じたアドバイジングが導入・実践されている。その支援内容は多岐にわたり、履修選択に関する相談や学生生活での人間関係にまで及んでいる。また、専門職としてアドバイザーが採用されることもあるが、雇用形態は任期付きの場合も見られる。アドバイジングは主として個人面談を通じて行われているが、履修計画の設計やピア学生の育成を目的とした授業が提供されるなど、正課との関連性を強化する取り組みもなされている。さらに、学内での認知度向上を図るため、クラス担任や学生課などの関連部署や教職員との連絡、教授会でのアドバイジングについての報告も行われている。また、アドバイジングの継続性を担保するために、ガイドラインの作成、マニュアルの整備も進められている。

しかし、これらは全ての大学で実施されているわけではない。また、アドバイジングが進んでいる大学においても、いくつかの課題が存在する。第1にアドバイジン

グの導入に際して、各大学のニーズに沿った目標は設定されているものの、その達成状況や成果に対する明確な評価基準はまだ確立されていない点が挙げられる。第2に、さまざまな努力や工夫がなされているにもかかわらず、学内におけるアドバイジングの認知度は十分とは言えない。第3に、学生に対するアドバイジング支援は他の業務と比較してその境界が曖昧であり、特に他部署との連携が不可欠である。しかし、その連携体制やアドバイザーの専門性維持のための組織化が十分にされていないことも問題として指摘される。

このように、日本におけるアドバイジングの制度化と大学での組織化はまだスタートラインに立ったばかりである。そのため、これらの課題はすぐに解決することは難しく、長期的な視点での改善が求められる。また、学生の多様化が進む現状では、学生が抱える課題も複雑化しており、既存の専門人材や人的リソースに過度な負担が生まれていることも喫緊の課題として認識されている。

おわりに

本稿では、日本におけるアドバイジングの実践と課題

について、米国の状況も参考にしながら整理してきた。最後に、学生本位の学生のスチューデント・サクセスを支えるために、JAAAが今後取り組む重点策について、以下の3点を私見として挙げておきたい。

1点目は、アドバイジングの質の向上に向けた支援の成果を適切に評価するシステムの確立である。具体的には、アドバイジングの効果を可視化し、改善に結びつけるための評価体制の整備である。2点目は、アドバイザーの専門性を高めるための研修プログラムや資格制度の充実である。アドバイザーの知識とスキルの向上は、より質の高い支援を提供するために不可欠である。継続的に専門性を高めるための学習機会や認定制度が整備されることで、アドバイザーの専門性や支援の質が向上することが期待される。3点目は、国内のアドバイジング事例の集約と共有である。国内の実践事例を集め、共通する課題や成功事例を共有することで、相互に学び合い、支援体制を強化することができる。またこのプロセスは、日本におけるアドバイジング全体の質向上にもつながる。

米国では、NACADAが、前述のコア・コンピテンシーの提示に加え、必要な情報や能力開発の機会を提供

している。さらにアドバイジングによる学習成果の設定やその評価方法などさまざまな提言も行っている。NACADAの歴史が40年以上に及ぶ一方で、JAAAは設立からまだ4年目である。今後も、JAAAはアドバイジングの実践に貢献するため、継続的な能力開発の機会や情報共有の場を提供し、長期的な目線で日本の大学にアドバイジング文化を形成していくことで学生の支援に寄与していきたい。

【参考文献】

- 清水栄子(2015)『アカデミック・アドバイジング その専門性と実践』東信堂
- Kuh, G.D., Kinzie, J.L., Buckley, J.A., Bridges, B.K. and Hayek, J.C. (2009) What Matters to Student Success: A Review of the Literature. Vol. 8, National Postsecondary Education Cooperative.
- 中央教育審議会(2012)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyoo/chukyoo0/toushin/1325047.htm
- 中央教育審議会(2023)「学修者本位の大学教育の実現に向けた今後の振興方策について」(審議まとめ) https://www.mext.go.jp/content/230313-mxt_koutou_01-000027826_3r.pdf
- 文部科学省(2023)「令和3年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要)」https://www.mext.go.jp/content/20230908-mxt_

daigakuc01-000031526_1.pdf

JAAA (2021) 「日本アカデミック・アドバイザーズ協会会則」
<https://academic-advising.jp/about/regulation/>

清水栄子 (2024) 「日本におけるアカデミック・アドバイザーズ」『文
部科学教育研究』 No.574, pp.31-33.

Kuhn, T. (2000). Historical Foundations of Academic Advising. In
Gordon, Habley and Gries. *Academic Advising: A Comprehensive
Campus Process*. San Francisco: Jossey-Bass.

NACADA (2017) “NACADA Academic Advising Core Competencies
Model” <https://nacada.su.edu/Resources/Pillars/CoreCompetencies.aspx>

JAAA (2024) 『第4回年次大会要旨集』